

シリアの現状の背景：名望家の変容

森山央朗

同志社大学神学部准教授

シリアを含めた中東地域の伝統的な社会構造においては、在地名望家が重要な役割を果たしてきた。彼らは、大商人や大地主などとしての経済資本と、ウラマー（イスラーム宗教知識人）などとしての文化資本を併せ持つことで、民衆の敬意を獲得し、民衆に対してパトロンとして振る舞うことで、在地社会において強い影響力と権威を行使してきた。また、政治権力（王朝、国家）のために在地の民衆を取り纏め、政治権力に対して在地社会の利益を代表する存在でもあった。

こうした名望家は、中東地域だけでなく、前近代の世界に広く見ることができる。中東地域における名望家の特徴は、その地位を制度や組織によって裏付けられていないことである。名望家としての地位と影響力・権威の源泉となったのは、民衆も含めた周囲の社会からの承認であり、その承認を支えたのは評判である。例えば、12世紀から13世紀のダマスカスを代表する名望家であったアサーキル家は、経済的な成功によって得られた資金を子弟の教育に投資し、ウラマーとして高い評判を獲得した人物を連続して輩出したことで、ウラマー名家として承認されたと考えられる。そして、当時のシリアを支配していたアイユブ朝の庇護を受け、ダマスカスの在地社会に大きな影響力を行使した。しかし、ウラマーとしての評判は、家名に付いて世襲されるものではなく、あくまで個人に帰属するものであった。そのため、ウラマー名家として名声を博したとしても、その後も高い評価を得るウラマーを輩出し続けることは難しく、アサーキル家も14世紀には史料から消え、ザハビー家などの他の名望家にとって代わられていた。

もちろん、血統や家系といった要素が全く意味を持たなかったわけではない。ウラマー名家の中には、預言者ムハンマド（632年没）の子孫と認められた家系が多く含まれる。また、父系の祖先を共有するという意識によって結びつく擬制血縁集団、いわゆる「部族」が重要な社会的紐帯である農村・遊牧地域の名望家は、部族の中で高貴と見なされる血統に連なることが重要な条件となってきた。しかし、血統や家系だけで名望家として存立できたわけではなく、パトロンとしての役割を果たすための経済資本と文化資本がなければ名望家として振る舞うことはできなかった。

その文化資本を、19世紀までの名望家の多くは、イスラーム法学などのイスラーム宗教諸学の分野から得てきた。ムスリム社会において、イスラームに関する知識に高い価値が認められてきたことは言うまでもない。また、19世紀までのムスリムの諸王朝は、その政

策や統治の実態がどうあれ、イスラームを支配の正統性の根拠としていた。ウラマーとして高い評価を得ることは、王朝権力の庇護を受け、様々な利権を獲得する上でも有効であった。ウラマー名家は、王朝権力との間で庇護と協力を交換し、在地社会の秩序の維持に努めた。そのため、彼らのイスラーム理解は、概ね穏健で保守的であり、現状肯定的であった。『クルアーン（コーラン）』やスンナ（預言者ムハンマドの慣行）に基づいて、王朝権力や社会の現状を批判するウラマーがいなかったわけではないが、名望家を構成するウラマーの大多数は、一見すると『クルアーン』やスンナに基づかないような事柄でも、それが国家と社会の秩序を守るために必要と考えられれば、イスラーム諸学の学説や理論の蓄積を駆使して、『クルアーン』やスンナに結びつけることで正統化し、政治や社会の価値的安定を維持することに貢献してきたのである。

こうした名望家のあり方は、19世紀から今日まで大きく変化してきた。その原因は、軍事・政治・経済・技術・文化の各方面における西欧諸国の圧倒的優位、いわゆる「西洋の衝撃」である。同時に、民族主義や民主主義といった西欧起源の近代的思想が流入したことによって、イスラームは、統治理念や支配の正統性の根拠としての独占的な地位を失った。シリアにおいては、19世紀から20世紀初頭まで、オスマン朝（1299-1922年）の統治の弱体化に起因する政治・社会不安とフランス委任統治（1920-1946年）を経て、1946年に世俗的民族主義を標榜する共和国が成立した。

国家と社会の大きな変動の中で、名望家の地位と権威、社会的影響力は、変容・多様化しつつ、相対的に低下していった。近代科学などの西欧で発達した学問や技術が「先進的」なものとして紹介・導入され、伝統的なイスラーム諸学が「後進的」と批判されたことで、ウラマー名家は、存立基盤としてきた文化資本の価値の低下に直面することとなった。同時に、西欧近代的な学問・技術を習得した新興エリートが台頭し、ウラマー名家が都市部における名望家層を寡占する状況も崩れた。農村・遊牧地域においても、工業化による都市部への人口流出や遊牧民の定住化政策によって、部族的紐帯が弱まり、部族の名望家の影響力も減退していった。

新興エリートの台頭においては、近代的な学問・技術の導入と並んで、近代的な軍が組織されたことも大きな役割を果たした。政治家や官僚、教師、技術者や医師などとして出世することが、それなりの経済資本や文化資本を必要としたのに対して、軍は、経済資本や文化資本を持たない民衆層出身の兵士にも給料を支給して教育の機会を与えた。また、世俗的民族主義と植民地統治のための分断政策は、前近代のイスラーム王朝においては軍事と政治への参加を制限されてきた非ムスリムに軍人として出世する機会を与えた。

ハーフィズ・アル＝アサド大統領（在任 1971-2000 年）は、近代的な軍と宗派的「平等化」を利用して台頭した新興軍人エリートの典型である。ハーフィズは、ラタキアの山村出身で、スンナ派から「異端的宗派」と見なされてきたアラウィー派に属しながら、軍人としての地位を登り、軍という巨大な暴力装置／利権集団を掌握することで、名望家層を抑えて権力を築いた。

一方、旧来の名望家は、主に次の 2 つの方法で地位と影響力の保全を図った。すなわち、「脱イスラーム化」と「改革主義的イスラーム主義」である。このうち、「脱イスラーム化」とは、社会的な評価や文化資本を獲得する舞台として、イスラーム宗教諸学ではなく、近代的で世俗的な学問や技術を選択するようになったことである。ウラマー名家であっても、国家や社会の変化に合わせて「脱イスラーム化」することにあまり抵抗はなかったようで、19 世紀から 20 世紀にかけて、18 世紀までのウラマー名家の出身者の多くが、世俗的な知識人や政治家、官僚、医師、技術者などとなった。このため、シリアにおけるイスラーム宗教界には、大きな人的空白が発生し、そこに、東部出身のクルド系の人々や、様々な理由でシリアに移住してきたマグリブやエジプト出身のウラマーが入り込むことで、イスラーム宗教諸学を担う人々が大きく入れ替わったと、最近の研究によって指摘されている。

これに対して、「脱イスラーム化」を選択しなかった名望家出身者は、イスラームに則った統治や社会という理念が自明ではなくなった近代において、改めてイスラームの価値を主張し、近代に適合したイスラームの改革を主張する思想・運動、すなわち、「改革主義的イスラーム主義」を唱道することとなった。カワーキビー（1902 年没）やラシード・リダー（1935 年没）などに代表されるように、「改革主義的イスラーム主義」の思想家には、伝統的なウラマー名家の出身者が多い。

もちろん、「脱イスラーム化」した名望家と「改革主義的イスラーム主義」を唱道した名望家の間に明確な境界があるわけではない。「脱イスラーム化」といっても、個人の信仰としてはイスラームを保持した人々がほとんどであり、イスラームを完全に否定した人はごく少数である。また、「改革主義的イスラーム主義」に基づく最も顕著な運動であるムスリム同胞団の創始者、ハサン・アル＝バンナー（1949 年没）が近代的な教育を受けた学校教師であったように、世俗的・近代的な職業や専門知識を持ってイスラーム主義運動に参加した名望家やエリートも多い。しかし、18 世紀までの名望家たちが、イスラームを一致した価値として奉じていたのに対して、イスラーム主義から共産主義に至る様々な思想を主張するようになったことが、名望家同士の意見の集約を難しくしたことは否めない。

アサド政権は、地縁や血縁、姻戚関係といった私的な紐帯によって大統領個人と結びつ

く人々で権力の中核となる軍の精鋭と治安機関を掌握し、議会の議席や閣僚のポスト、イスラーム宗教職などの配分を通して一部の名望家に利権を供与し、彼らの忠誠を確保した。その一方で、政権に批判的な名望家を弾圧し、彼らの社会的影響力を削いでいった。アサド政権は、一部の名望家を取り込み、一部の名望家を弾圧・排除することで、政権に対する強力な対抗勢力となり得る名望家層を分断し、比較的安定した権威主義体制を築いていたのである。特に、1982年のハマー事件によって、西部の豊かで強力なスンナ派名望家の多くが参加したシリア・ムスリム同胞団を壊滅に追い込んで以降は、反体制的な名望家のほとんどを国外に追放するか、沈黙させることに成功してきた。

しかしながら、暴力装置を掌握する政権が、名望家の懐柔と弾圧を通して支配を行うという構造は、前近代の王朝の支配構造に類似するものであり、国民個々人の自発的な忠誠や国家への参加意識を涵養するものではなかった。加えて、在地社会の利害を代表する名望家の影響力は、地域間の利害対立を助長し、近代的な国家・国民統合を阻害する要因ともなった。アサド政権は、近代的な国家・国民統合の未成熟の上に権威主義体制を維持してきたと言えるが、2011年以降の反体制運動の高揚と内戦化によって、これまで政権の下にとどまっていた名望家の一部が離反すると、全土の支配と国家・国民統合を維持することができなくなった。

他方、反体制運動の側でも、名望家は相応の影響力を発揮してきた。シリア国民評議会において中心的な役割を果たしてきたのは、1980年代に国外に追放されたムスリム同胞団に関係する名望家である。また、シリア革命反体制諸勢力国民連立（国民連合）には、アサド政権の苛烈な弾圧と内戦を逃れた名望家が多数参加している。しかし、それらの名望家たちは、シリア国民の統一的な支持を収攬することには成功せず、むしろ、地縁や宗派などによって複雑に分節される在地社会の利害対立を持ち込むことで、反体制運動の統合を阻む要因となってしまっている。

現在のところ、名望家の影響力は、シリア国内においても、国外の反体制運動においても、国民的な合意を形成する方向にではなく、国民を分断し、内戦を長期化させる方向に働いていると言わざるを得ない。とはいえ、実効的な自由選挙や自由な政治的議論がほとんど行われてこなかったシリアにおいては、非人格的な制度を通して国民合意を達成することは難しく、シリア各地に暮らす人々の意向の調整と取り纏めを行い、それを政府や国際社会に伝える有効な回路は、未だに名望家を置いて他にないと考えられる。反体制運動がアサド政権を打倒する目処も、アサド政権が全土の支配を回復する目処も立たず、政権と反体制運動の交渉の糸口も見つからず、「イスラーム国」のような過激武装組織が国内に入り込むという困難な状況の中で、在地社会の利害調整や秩序の維持を担ってきた名望家

の地位と影響力がどのように変化していくかということは、シリアの国家統合が回復するのか、破綻するのかを見通す上で、一つの重要な要素とも言えるのである。